

## アイヌ史における二大改宗騒動

9月2日(金) 18:00~19:30 東京会場

9月7日(水) 18:00~19:30 札幌会場

講師 佐々木 馨 北海道教育大学函館校教授

ただいま御紹介にあずかりました佐々木馨と申します。御縁がありまして、今回このようなところでお話をさせていただくことをありがたく思っております。

今日のお話でございますが、アイヌ史における二大改宗騒動、すごくタイトル自体はショッキングなことでありますが、二大改宗なのか一大改宗なのか、あるいは三大改宗なのかという、そういうことは、これは評価の問題だと思っておりますので、仮に私は二大改宗というふうにしてございまして、話の流れでいけば三つのエポックがあったというふうな話になるかもしれませんが、その点は御了承いただきたいと思っております。

先程、事務局の方とお話したのですが、こういう宗教と民族というのは、余り今まで聞く機会がなかったというふうなお話ですが、それだけに民族と宗教というのは大変な重大な問題があるというのは、世界各国、今現在も含めてそうだと思います。心の内面まで考えるというのは、誤解を招くことも時としてあるような、そういうシビアな問題なのかと思っておりますが、私は歴史の立場ですので、客観的な立場でお話申し上げたいと思っております。

早速ですが、今日のお話の資料はA4の1枚ものがございまして、これは概要でございます。そして、A3の大きい版で資料AからEまで5枚ございます。資料Aは①から⑥までありますが、AからEに至るまで全部で通し番号では⑨までナンバリングしてございます。

それでは、今日のお話の流れをまず最初に確認したいと思います。A4のレジュメに従って見ていきますと、最初はアイヌ民族と日本人の来世観の相違点。アイヌ民族と日本人の宗教観は同じではないわけですので、その際だったところを確認したいと思います。その上で、2番目、江戸時代に幕府が北海道を直轄したときの蝦夷三官寺と言われて、有珠の善光寺、様似の等澍院、厚岸の国泰寺、その三つの寺院によるいろいろなアイヌ民族の文化折衝、宗教折衝の問題です。これが、今日の話の中心話題になりますが、それ以外にもその前の古い時代、そして江戸時代よりも新しい時代も当然あるわけですから、それを通観してみたいというふうに考えております。

したがって、二つ目の柱としては、古代・中世の開拓といっても、これは和人側から見たということになりますので、アイヌ民族からすれば、それは北海道の先住民族であるアイヌ民族の立場からすれば、それは日本人が一方的に進出してきたんだということになるかと思っております。そういう北海道と東北地方がどのように開けていくかという、そういう話を2番目にしたいと思います。

江戸時代には、いよいよアイヌ民族と和人との文化接触が、より一層頻繁になってまいります。その近世のお話をし、その上で、最後はまとめ兼ね明治以降のお話をし、そして全体のまとめに入りたいと思っております。これが三つ目の柱です。

まず最初に、資料の①アイヌ民族の来世観。これは私が申し上げるまでもなく、神観念は日本人とは違って、すべての自然界に神の存在を認める、そういう世界観があるわけですね。②は文化人類学の方の一節でございます。御承知のところであるかと思いますが、アイヌ・モシリ(人間の世界)と、それからカムイ・モシリ(神々の世界)と、ポクナ・モシリ(下方の世界)の三つの世界観で構成されている。また、来世・他界観にあっても、人は死後に必ず「神」になり、カムイモシリの住人となる。人はその死後も、この世と同じ生活をしており、違うのは「この世」と「あの世」が相互に裏返しの世界であります。①は「北海随筆」という板倉源次郎の書かれた一節に、アイヌ民族の死霊観を述べているところがございます。

それをちょっと確認いたしますと、「医業なきゆへ瘡瘡、麻疹、時疫にて死亡の者多き故、病を怖れ、死を忌事甚だしく、病者あれば、父子兄弟と雖も捨置て山中へ入り、死して後帰る。死者の取置は、新敷きアツシを着せ、新敷きむしろに包み、山中へ送り、秘蔵せし物ども不残ともに埋て、家は焼すて、又改め作りて居せり。故に壮年なれ共死の用意は予め心掛置と也。死者の妻はかぶり物をして、面をあらはさざる事凡三年、又再び嫁せず、惣て女の心貞実にして、嫉妬の念なく、夫に従ふ道甚だ以て慎み有り。」こういうふうなアイヌ民族の来世観、死霊観を踏まえた上で、日本人、和人はどうでしょうか。③は青森県の恐山、イタコの口寄りで有名な恐山の春まいり、夏まいり、秋まいり、それを宗教学の方が調査されたものを、表にあらわしたものです。

何のために恐山にお参りしたのでしょうか。春まいりで一番多いのは五穀豊穡をお祈りするために参ったのが35件、大漁祈願を目的にしたのが13件、それから家内安全12件、そのほか身体堅固、虫封じが合わせて62件、一方、この春まいりの時の祖先供養とか死者供養を目的にするのは、それぞれ11件、9件、合計20件というぐあいになります。

それが、夏まいりになりますと、春まいりとは違って違っていて、五穀豊穡を願ってというのが12件、大漁祈願が3件、家内安全が11件、合わせて26件であるのに対して、死者供養が57件、先祖供養39件、死者に会うため、

新仏供養、イタコの口寄、歯骨おさめ等々、これが131件であります。明らかに春まいりと夏まいりは性格が違うというふうになります。秋まいりはと申しますと、1年間の五穀豊穰のお礼の参りが5件、それから大漁祈願3件、家内安全2件、先祖供養、死者供養がそれぞれ3件、2件というふうに、秋まいりと春まいりがほとんど同じような性格を持っております。これは、表現を変えて申し上げますと、春と秋は現世の、この世での生産の豊かさ、それをお祈りするという現実主義、現世主義のお参りが目的。それに対して、夏まいりは、この世というよりも、あの世に行った人方との交信をするためにお参りする、そういう意味の死者供養、先祖供養だと思います。これが日本人の一般的な先祖供養観となるのかなと思います。

アイヌ民族の方が考えられるように、必ず神になるというわけにはいかななくて、日本仏教の場合には、決して平等に仏になれるというわけではなく、地獄と極楽があったりするわけですので、そこに不平等も存在します。その点、アイヌ民族の世界観は、必ずカムイモシリの住人になれる、カムイとアイヌの関係は裏返し関係であり、すごく明快な死生観であります。こういう民族としての宗教観に相違点があるということ踏まえた上で中身に入っていきたいと思えます。

一般の歴史的な記述でいけば、南からだんだんと北の方に和人が住みつくようになってくる、そういう開拓移民、移住というのが普通の今までの捉えられ方だと思います。それを一つの表現としているのが、④の「海国兵談」で知られる林子平が書いた「三国通覧図説」でございます。その中で、3つのステップを置いているわけですが、林子平に言わせれば、「天平宝字ノ頃迄、奥羽ノ両州ハ王化ニ服セザリシ国也。」「今ノ桃生郡ノ辺ヨリ南ヲ日本ノ地トシ北ヲ夷地ト定メラレタリ。是古ノ蝦夷国界也。」というふうにして和人地化していった結果、古代の蝦夷と和人との境目が形成される。

次に、「其ヨリ四十余年ノ後、桓武帝ノ延歴中ニ」坂上田村麻呂の蝦夷征討があり、その結果として、和人と蝦夷は津軽の外が浜を境にして、つまり津軽海峡を中に挟んで一つの境界ができる、これが「中ゴロノ蝦夷国界」というわけです。

次に、「其後六百七十余年ヲ経テ嘉吉三年」和人が北海道に居住し始めたあと、「今ノ蝦夷国界ニシテ日本風土ノ限リトスル」近世の時代に入ったと、林子平は考えた訳です。その領域は多賀城から熊石までとしています。

ここで注意しなければいけないのは、レジュメの2番目、古代・中世の開拓と開教の歴史的意義でございます。その中の(1)、古代東北の宗教世界ですが、その下のところに着夷と脱夷と転夷という言葉を使っております。その着夷と脱夷と転夷というのは何かと申しますと、着夷というのは、大和政権、奈良時代、平安時代の律令国家のころ、都人には中華意識があり、その都人からすれば北方に住む、東北地方から北の地域、それは蝦夷の地域だというふうにして捉えられていました。その状況を着夷というふうに私は考えたいと思えます。つまり、東北地方の人間、秋田、

岩手、青森の古代人には、蝦夷の血が北海道と同じように流れていたと想定されます。ご存知のように、坂上田村麻呂とアテルイとの合戦で、坂上田村麻呂によって、アテルイを族長とする東北の蝦夷軍団は決定的に打ちのめされます。敗北したにもかかわらず古代東北人は、後世になりますと坂上田村麻呂を顕賞するようになります。矛盾しているのですが、自分たちの立場を否定した相手を迎え、一方では耐えながら、そして子孫に伝えていくという、そういう迎え、耐える、伝えるという矛盾した行動をとります。古代の東北人は、そういうことをしながら少しずつ自らの蝦夷の血を日本化していく。私はこのことを脱夷と呼んでいます。蝦夷意識を自ら克服するという意識変革です。

意識変革したあと、東北人はどうしたんでしょうか。次は転夷になります。これは、鎌倉時代に顕著になるかと思えますが、東北の蝦夷と言われてきた人方は、自分たちは蝦夷ではない、日本人だというふうにして転夷いたします。では、だれに転夷したのかというと、北海道の中世の蝦夷、つまりアイヌ民族だろうというふうに思えます。それは、蝦夷意識の変化というふうに私は呼んでもいいのではないのかなというふうに思えます。それを通して東北の人間は、日本人としてのアイデンティティーを形成していった。このような流れは平安時代から鎌倉時代にあつたんだろうというふうに思えます。

それを実際に資料で確認したいと思えます。この資料の⑤は表でございますが、これは津軽地方、青森県の地域にどういふ寺社がどんな具合にして建てられたかということを書いた、「津軽一統志」という江戸時代につくられた歴史書でございます。それによりますと神社について1から29まであります。寺院として1から6まで書かれておりますが、右側に備考欄あるいは創立年次はいつかということに目を通していただきますと、坂上田村麻呂が圧倒的にいろいろ関係していることが分かります。これは、この坂上田村麻呂が、津軽地域にこのような神社をつくったというふうには伝えられるということでもあります。これを少し資料に則しながら見ようとしたのが、⑤と⑥の真ん中あたりに文字資料がありますが、それを総合すると円智という坊さんが建立した寺院は真言宗と今まで伝えられていますが、当初は、そうではなくて天台宗だった。すなわち、円智上人の開基と伝える阿遮羅の三千坊のことを、右の一文は天台宗の根本道場である比叡山との関わりで捉え、しかも、その深沙大権現を坂上田村麻呂に関連づけている。これをもう少し踏み込んで申し上げますと、この津軽の地域における800年代の初頭の時期は、天台宗と坂上田村麻呂、そして桓武天皇、そういう三つのものが三位一体の中で宗教世界を構成したというふうに考えたいと思えます。それは、天台宗を中枢にした古代東北の宗教世界と言っていいでしょう。

次に、古代東北は天台宗を中心にしたものが宗派的には多かったということを確認した上で、次に、鎌倉時代について検討してみたいと思えます。

鎌倉幕府は、東国を基盤とする政権であると同時に、鎌倉幕府独自の宗教世界を持っていたのだらうというふうに

考えますが、その図式的な説明は⑥に枠組みで書いております。これは私が考える当時の中世の思想史の五つの思想空間であります。一つは、天皇や公家側の天台宗を中心にした「顕密主義」という思想空間、それに相対立する形で、鎌倉幕府を中心にした武家的な体制宗教がございます。これは、臨済宗と真言密教、それを略称して「禅密主義」と申しますが、これが後で問題になってまいります。こういう体制側の宗教世界が二つありまして、それに相対するものが、いわゆる鎌倉新仏教と言われます法然や親鸞、道元、日蓮という反体制宗教者による、三つ目の「専修主義」の世界です。その一方で、こうした生臭い現実の対立を避けるような人々もたくさんおりました。それが遁世門と言われるわけですが、鴨長明や、あるいは一遍捨聖、西行法師、俊乗防重源と言われる現世の対立をから一歩でも二歩でもそれから離れようとする、超体制宗教の世界です。そして、もう一つは、民衆側の世界であります。

民衆は、新仏教者、反体制宗教者の布教活動を受けながら、少しずつ自らの「民衆神学」といいますか、庶民の宗教観を形成していき、中世には以上の五つの思想空間が存在していたと考えます。ところで、鎌倉時代になりますと、幕府は臨済宗と真言密教、それらを中心にした宗教世界を構築します。それを示すのが、資料⑦になります。⑧、⑨、⑩は鎌倉幕府の宗教世界が東北にどのように影響したんだろうかということを示す資料になります。

鎌倉幕府が臨済宗と真言密教、それに深く傾斜した宗教政策をとったわけですが、それを端的に示したのが有名な執権時頼の「廻国伝説」だと思います。私は、江戸時代の水戸黄門が行った漫遊、あれが「政治の旅」だとすれば、私は執権時頼のは「宗教の旅」と考えたいと思いますが、いずれにしても一つの目的を持って諸国を廻国したという点では、似通った歴史現象だと思います。

名執権時頼と言われる彼が鎌倉幕府の「禅密主義」の世界をつくり、それを背景にしながら東北地方を回ります。その一つが⑦の立石寺（山形県の山寺と通称）であり、そこを、「北条時頼微行し、身をやつしてここを過ぐと。そして、台徒の盛りをねたみて、命じて禅宗に改めた」というふうになっています。つまり、北条時頼が身をやつして諸国を行脚した折りに、たまたま立石寺に立ち寄ったが、この立石寺はこの当時、天台宗寺院として余りにも隆盛していた。それを妬んで時頼はそれを至上命令的に禅宗へと改宗させたというふうになり、これこそ時頼による改宗であります。

同様に、宮城県の松島寺（瑞巖寺）の伝えもございました。宝治2年4月14日、松島寺で山王七社大権現の祭礼が行われていた。出家して東国修行のついでにこの地にたどりついた時頼が、祭礼の舞楽を見物することになった。興にのったあまり大声を上げた。これを衆徒の普賢堂閹闍が怒り、ほかの人も同調したために、時頼はあやうく殺されそうになった。

そこを祭礼に免じて命だけは逃れ、岩洞で休んでいたところ、禅僧の法身という坊さんと出会って、しばし問答することとなった。そのやりとりの中から、時頼は法身が言

う「天台ノ秘事、勤行ニ難タシ」「禅家ノ法祖広ニタレリ」というようなことを聞いて、鎌倉に帰った後、三浦義成なる者を使わしてその寺を焼いて、正元元年に法身和尚を松島延福寺、つまりそこの住職にした。これはほかでもなくて、ここに松島寺もまた執権の廻国修行の折りに天台宗から臨済禅に改宗させたという歴史的事実であります。

以上の二つの例は、伝説でありますけれども、全くの架空のものでもないでしょう。背景には鎌倉幕府という臨済宗や真言密教を重要視する背景があったから、こういうことも可能だったのだろうなというふうに思います。

一方、当時、北海道を含め東北地方を牛耳っていたのは、蝦夷管領安藤氏。⑨にありますように、「安藤五郎ト云者、東夷之堅メニ」という義時の時代に代官として置かれたとか、夷嶋の押として置かれたとか、そういう伝えがございます。いずれにしても津軽の安藤氏が、和人の一人の代官として十三湊に君臨していたというわけです。

この安藤氏が⑩によると、どうやら真言宗に改宗したために、首を切られるということが起こります。「真言師だにも調伏するならば、弥よ此国軍にまくべし」、「ゑぞは死生不知のもの、安藤五郎は因果の道理を弁へて堂塔多く造りし善人也。いかにとして頸をばゑぞにとられうぬるぞ」、「文永五年の比、東には俘囚をこり、西には蒙古よりせめつかひつきぬ。日蓮案云、仏法不信なり。定て調伏をこなわれんずらん、調伏は又真言宗にてぞあらんずらん」というふうに、日蓮という坊さんの独特の真言宗批判の幕府批判の中で引用されています。言いたいことは、これは津軽山王坊という仏教寺院をつくった安藤氏、これが真言宗に傾斜していたためにということになりますので、それは逆から言えば、もともとこの山王坊というのは天台宗系の寺院だったと言われているわけでありまして、そこにありますように⑩のところですね。

この当時、幕府と津軽地方とを宗教的にきり結ぶのは、津軽山王坊であり、これは古代にあつては阿倍氏のもと、天台宗に属する宗教施設であった。阿倍氏を嗣いだ安藤氏の世においても、ある時期までは天台宗寺院であった。しかし、ある時期を画して、立石寺は松島寺と同様に、中世的な改宗をとげることになる。すなわち、文永五年以前には天台宗から真言宗に改宗していたと考えられます。こういうふうにしまして、鎌倉幕府の臨済宗と真言密教の和合たる「禅密主義」が、見事に東北地域には改宗という形で天台宗から改宗していくのであります。

その一つの変形が⑪でございます。この⑪は、アイヌ民族と中世の幕府との関係を考える一つの参考になるだろうと思います。もしもそれが、一歩踏み込んで改宗というふうにして見ることでできるとすれば、今日のお話はアイヌ史における三大改宗騒動となります。

⑪ですね、「往日、鎌倉ニ安藤五郎トテ武芸ニ名ヲ得タル人アリケリ。公命ニヨリ夷嶋ニ発向シ、容易夷敵ヲ亡、其貢ヲソナエサセケレバ、日ノ本將軍トソ申ケル」という、安藤はすごく地蔵信仰が盛んであった、ある時、北の方から、くだんの夷ども年貢上納にやってきた。それを安藤五郎が召し寄せて、結縁の為にとて戸を開いて地蔵菩薩を拝

ませたと言っています。そうすると、それを見て、アイヌ民族の人たちは、このような人は我が国にもいる。これをカシラハケノ小天道と言いつつ。それを耳にした五郎は、それではぜひ「ツレダチテマイルベシ」と。そのかわり、年貢を免除するといったという話です。

そして、次の年の4月中旬ごろに連れてきたわけですが、その連れてきたのを見れば、篠小竹という物を編んで、昆布という海藻を巻付けていた。そして杖の一つ持っていた。それが信心深い安藤には「アリガタキシルシ」と見えたということです。そのころ鎌倉幕府の拠点寺院である臨済宗の建長寺には、御本尊が三十一体の地蔵であったのに、一つ欠けていたという。その欠けていた錫杖とは、まさにアイヌ民族が連れてきた「小天道」であったのです。この話しは、建長寺の地蔵菩薩が蝦夷島に布教するために島渡りしていたということを示すわけですので、それは先ほどの東北地方の山寺や、松島寺や、あるいは津軽山王坊にも通ずる執権時頼の「廻国伝説」の延長の上に考えられると思います。もしも、そういうふうな読み込みができるのであれば、これは一番早いアイヌ史における改宗騒動の一つと考えられると思います。では、今度は北海道にフィールドを移しまして、⑫でございます。

嘉吉年間の頃、蝦夷島に南部氏との抗争の果てに安藤氏が渡って来ます。やがて、蠣崎政権は道南を中心にした和入地に寺院を造営していきます。その結果、⑫のところにありますように、蝦夷島には中世寺院が13建立されます。この13の内訳は、阿吽寺という真言宗から、13番目の西教寺の浄土真宗に至るまでであるわけです。中世寺院としてこのように和入地にお寺がつけられたということですが、どんなふうにして中世寺院がつけられたのでしょうか。

⑬は青森県の例でございますが、浄土真宗の寺院が四つあります。油川に建立された円明寺、法源寺、それと岩木町の真教寺、それと岩木町の専徳寺、この四カ寺の浄土真宗寺院であります。この四カ寺が単独で津軽地域に布教したのではなくて、その背後には、蓮如が率いる本願寺教団があったのであります。つまり、文明3年に、越前国の吉崎御坊を建立した蓮如は、弟子を蝦夷・北奥羽地域に派遣して、組織的な教団拡張を図った。この北辺布教の中心となったのが、ほかでもなく九州出身の俗名・菊池武弘でありました。これは日本の中世史における中世的な殖民、移民であり、それが東北地方を踏まえながら、北海道にまでこれは入ってくるわけです。その流れの上で⑫の13の中世寺院がつけられたんだろうと思います。

この⑬は浄土真宗ですが、曹洞宗の蠣崎政権の場合には、法源寺や法幢寺のように、曹洞宗のお寺が多いわけですが、これは永平寺の道元の流れをくむ寺院が、山形、秋田、青森の⑬の浄土真宗とパラレルの関係になるくらい大きな宗教勢力を示しました。

それは、蠣崎政権の魂の平安と結びついていくわけですが、そのことはアイヌ民族にしてみれば、進出・侵略以外の何ものでもなかった。そういう表裏の関係を持ちながら、ともかくも道南を中心とした地域に日本人が多く住み、そ

してそこに仏教を中心にした宗教世界が展開します。

次に、いよいよ近世、江戸時代になりますが、松前藩は米がとれない、アイヌ民族との交易を中心とする特殊な藩ですが、その中であって、お寺はどういうふうにつくられたのだろうかといいますが、⑭の資料のようになります。

⑭これは近世前期の本末関係、それと近世後期の本末関係を1800年を境にして前期と後期と、そういうふうに分けてあります。

その1800年以前のお寺は、松前城下の寺院が中心になって、いろいろな末寺をつくります。例えば、曹洞宗の法幢寺、これが末寺として近世前期には6つつくったとなるわけですが、では、後期になるとどうかといいますが、曹洞宗の高龍寺が7つつくると、法幢寺が3つしかつくれないというふうな立場が逆転いたします。松前の城下寺院が幕府直轄を境に、本末関係が逆転し歴史の軸足が松前から函館に移り、その後、札幌に移っていく。そういう動きがよくわかるのも本末関係でございます。

⑮は、松前藩がどういうふうにしてお寺を保護したかを示すものです。その表にありますように、近世前期と後期に、お金とかあるいはお米を与えながら一方では保護いたしますけれども、幕府が直轄するあたりを境にして、だんだんとお寺自体が松前藩州から離れていってしまう。なぜかといえば、それはやはり支配が分断してしまったからだと思います。

ご承知のように260年の江戸時代の中で、前期に松前藩政があります。その後、第一次幕府直轄、そして後期松前藩政、そしてペリーが浦賀来航による、鎖国から開国という流れの中の第二次幕府直轄というように支配が分断するわけです。これは松前の城下町にすればすごく不安な要素が絡んでおりまして、だんだんと封建寺院も藩主のために尽くすというそういう立場から、だんだんと庶民の方に移っていき、庶民寺院化するのだろうというふうには思います。松前藩は確かに米が生産されない独特な、本州諸藩とは違う藩なわけですが、しかし、基本線は参勤交代を、隔年でなくても3年1勤、あるいは6年1勤という例外を持たされながらも、江戸幕府藩体制の中で組み込まれたというわけですので、その点は宗教世界も同じだと思います。

実際に、近世の前期にも後期にもいろいろなお寺がつけられました。近世前期は69の仏教寺院がつけられました。近世後期は63、合わせて132、中世13ありましたので145、江戸時代までに145ほどのお寺がつけられたのであります。

現在、北海道には2千ヶ寺くらいありますが、江戸時代までにそのうちの145ヶ寺がつけられたということになります。

いよいよ本論になりますが、幕府が蝦夷地を直轄した時に、蝦夷三官寺というものをつくります。それが、有珠の善光寺、浄土宗です。様似の等澗院、これは天台宗、厚岸の国泰寺、臨済宗という三つの宗派のお寺がつけられたわけですが。

三官寺が建立された目的とその意義等を見ていきたいと思いますが、その前に1点だけ⑯を補足させていただきます。

⑯は、城下寺院を中心にしたお寺が、末寺や分家寺をど

のようにつくっていたんだらうかということを考えるサンプルとしまして、天明6年のころのものを表化したものです。松前城下は、家の数は1,519戸、人口が6,385でお寺が17から23ございます。江差方面の西在は、家の数が3,290、人口が1万足らず9,910、寺院が31とこういふようになります。ですので、檀家数は大体300ぐらいとなります。東在、函館方面ですが、これは家の数2,160、人口はそれでいて9,940で寺院数は22、こういふふうにして一番少ない人口でいけば突符という福島町ですね。そこには20戸余りで人間は80人住んでいて、龍宝寺というお寺さんが一つあったというわけですから、20戸ぐらいを下限にして一つの集落にお寺がつくられていったように私は思います。

このようにして、和人の宗教世界もつくられていくわけですが、先住民族のアイヌ民族の立場からすれば、それは複雑なものがございます。⑩は、箱館奉行が考えた、なぜ三官寺をつくったのかという目的を述べているところです。「素より私共存念も、右寺院（三官寺）之儀者、御役人を初都而此方より参居候者共死亡之節取置之多め、二ツ二者往々邪宗門等之糺之為を第一之主意と心得罷在候間、蝦夷人共之葬埋を改させ候訳ニ者無御座、彼等ハ矢張往古より之仕来を其儘勝手次第ニ為致差置、若彼等本邦葬埋之風を慕ひ相願候者も御座候ハバ、是又制止メ候訳ニ者無御座、其意ニ任せ候心得ニ罷在候」これによると、三官寺の建立の目的は蝦夷地に赴く役人と、出稼人の和人を対象とした供養、それからキリスト教の排除にあると言っています。これが表面的な三官寺建立の目的だということ間違いはないと思いますが、しかし、後半のアイヌ教化をめぐる対立意見を考慮した部分、ここでは一応アイヌ民族の葬埋は、アイヌ側の意向に任せるといふ、「夷は夷次第」といふふうの方針をとっておりますけれども、果たしてそうなんだらうかということを見ていきたいと思ひます。

これは、一大改宗騒動の一番大きなところの話になるかと思ひますが、厚岸の国泰寺に伝わっている「日鑑記」には、死亡者の供養をどのようにしたのかということが書かれています。それを表化すると⑪のようになります。

そうしますと、前期幕領期のころ、アイヌ民族を23人、供養をしたということになります。後期藩政期になりますと13人に減ります。幕末の幕領期、第2次直轄期になりますと2人というふうに、数の変遷はございますが、幕府による蝦夷三官寺の建立当初は、アイヌ民族の供養も視野に入れていたように私には思われます。

⑪を見ていきたいと思ひます。これは、今の表と同じように、国泰寺の話です。一つに「国泰寺の掟書」というのがありまして、「一つ、天下泰平国家安全之勤行怠慢あるへからさること、蝦夷をして本邦之姿に帰化せしむること、毎々ニより死亡之民をして未来とくたつせしむること、隣邦之外夷渡来したるとも国のあさけりなからしむる事」とあります。仏教寺院である国泰寺にあって、「蝦夷をして本邦之姿に帰化」させるとき、仏教による教導以外に何かあるのだろうか。第三条の「死亡之民をして未来」に解脱させるという仏教的救済は、何も和人のみを対象としたわけ

ではない。アイヌ民族の方にも、強要したのではないだろうかと考えております。

それを示すように、この掟書を基調にしなが、もう一つ「申渡」というのがあります。その「申渡」の六つの中の、それを二条と三条にはこのように書いている。「一、天下御制禁切支丹邪宗門等ニ不帰依様望相守可申事」、もう一つは、「向後盆正者勿論時々寺へ致参詣無懈怠可致信心事」、盆と正月にもちゃんとお寺に来て参詣して、信心を起こしなさい、そういうふうには半ば強要すると私は思ひます。

これは国泰寺の例であります。同じようなことは様似の等澗院にもありまして、様似の等澗院の場合には、徳川家康の命日に東照宮祥月というお祭りがあるわけですが、そのときにアイヌ民族の方にも呼びかけをする。「東照宮御神号宮様御染筆被下置候様奉願上候」云々から始まりまして、それをいただいた上でお祈りをすれば、「国家安全、蝦夷地繁盛、仏法流通之基本云々」となっております。

このように、厚岸の国泰寺を中心にして、アイヌ民族の改宗すらもろんだようなことをしたように私には思ひてなりません。次にそれを実際に、もっとリアルに示しているのが、蝦夷三官寺の一つの有珠の善光寺だと思ひます。

⑫でございます。この有珠の善光寺は、三官寺のうちもっとも和人に近いわけですが、仏教によるアイヌ教化がもっとも先鋭的に実践されたというふうに思われます。その三代住職の弁端上人は、念仏上人と言われ、日本人のみならずアイヌ民族からも信を集めたといわれる。アイヌ語とあわせて一緒につくられた子引歌があるわけですが、これはアイヌ民族に対する改宗を背景にしたものと読んでもいいんだらうと思ひます。

現に⑬に参りますと、この有珠の善光寺では、実際にこのような念仏を中心に強要するような形で行っている様子が、1864年、元治元年の3月9日の日記として残されています。

ここは浄土宗のお寺ですので、「九日晴天、百万遍御修行、当初アブタ不残永住まで参詣、四ツ時相済、参詣之面々当所土人に御札名号不残に遺ス、凡大札当所百五十枚余、五対名号、壺人ニ壺枚ツ、四百余、アブタ大札百五十枚斗小札六百枚余」といふふうにしてあります。つまりこの日の善光寺がとり行う百万遍に、有珠とアブタ両場所の永住和人を含む人々が参詣した。参詣が済むと、和人参詣者のみならず、有珠のアイヌにまで名号札が配られ、その札は、大札、小札の二種類があつて、小札を名号札として配ったと。善光寺の日記には3月9日、このように記したあと、名号札のサンプルがあります。真ん中に「南無阿弥陀仏一百万遍功德成就処」と書きまして、名号を唱えれば、いろいろな病もなくなりますよと書いてあります。この名号札を、アイヌを含む関係者のすべてに配布した事実をどう理解すればいいのだろうか。私は、その状況から、遠く同じ念仏門の一遍が、鎌倉時代の信濃の善光寺を詣でた後、熊野権現に至り、そこで往生の確信を「南無阿弥陀仏決定往生六十万人」と書いた念仏の札を人々に配ったことを彷彿させる。この念仏の札を往生極楽のパスポートとして配る賦算という伝統を、時空を超えて有珠善光寺に見出すので

あると、私は仏教史の流れでいえばそのように見たいというふうに思います。

それについて㊸をみると、この善光寺日次記には、このアブタ・ウス両場所に、次のような廻章を回します。つまり、徳川家康の御年忌だというので、集まるようにというふうに呼びかけているわけです。これは、先ほどの㊸のところにもありましたように、様似の等澗院と同じような、これは恐らく三官寺に共通して行われた徳川家康の年忌があったんだらうと思いますが、このようにして、少なくとも住職は、アイヌ民族の心を十分理解しないまま、自分の仏教の方に引き込もうとしたのではないらうかと思いません。

では、ほかの立場ではどうだったんだらうかという、㊸の松前藩主のアイヌ教化観というのを見ていただきますが、真ん中あたりに書いてありますが、志摩守領分東蝦夷地ウス場所去ル午年、火事にあつたところから始まりまして、要するに、松前藩主は、和人地と接する蝦夷地の入り口のヤムクシナイと鷲之木では、善光寺の本来の任務である「教化等茂行届兼ねる」ので、蝦夷地の「シラナイ」方面に善光寺の転地先を求めざるべきだ、そういうふうに言っている。これは、それだけ松前藩主は、寺院によるアイヌ民族の教化をすべきであるということを経験した文章のように私は思います。

ここで、先ほどのレジュメに戻りますと、蝦夷三官寺の建立、それは表現は余りよくありませんが、日本人の住職による、日本仏教によるアイヌ民族の改宗を、今までは「蝦夷は蝦夷次第」というふうにして言う人もいましたけれども、私は結構それは意識化された改宗が背景にあったのではないらうかと思いません。それは、アイヌ民族の側からすれば、ありがた迷惑な話であります。実際、アイヌ民族の人が念仏に全面改宗したかといったら、まったくしないということになるわけですが、三官寺の坊さんにしてみれば、自分は日本人の立場でアイヌ民族に法を説いたと、そういう自己満足をしたと思います。アイヌ民族の側にしてみたら、全く心の内部は、許すことはなかったんだらうなというふうに思います。

それは、次の明治時代になってからも続く話です。明治以降に入る前に、城下寺院がいかに幕府が蝦夷三官寺をつくってから自分たちの立場を何とか確保するために開拓をしなければということを経験した一つの証が、㊸の史料かと思いません。「拙僧共自力を以庵室一字取結弘法作善相嘗、天下泰平、国土安穩之祈願専ら相勤、且者御法度之切支丹宗門等勿論相改、常々夷人ニ至迄勸善懲惡之教諭仕度奉レ存候、檀家之者江茂夫々申論田畑開発者不レ及レ申、樹木植立等ニ至迄丹誠為致度、又者山道儉岨之場所柄ニ者石像等茂安置為致、左候得者有信之者共自与屯致し末々村落ニ茂相成候半々、自然御開発之趣意ニ茂相叶」とあります。日本人の城下寺院の僧侶が、西蝦夷地、自分たちの宗勢を少しでも拡大しようと、躍起になった一つのあらわれを読み取れると思います。これも、アイヌ民族にすればえらい迷惑な話ですが、そういうことが実際にあったということでもあります。そういうことを受けながら、明治

時代を迎えます。

明治時代以降の話は、㊸から㊸になります。この明治時代から昭和にかけて、アイヌ史における三大改宗騒動があったかもしれないという話になります。

㊸番目、明治5年に教導職、お寺の僧侶と神社の神主を任命して、天皇制の布教に努めさせるという、そのような教導職なわけですが、その教導職の設置を決めたのを受けて、開拓次官の黒田清隆は次のように言っております。「北海道ノ儀モ、至急施行相成候様仕度、管館港ニ於テ、耶蘇教蔓延ニ付、長崎同様、相当ノ教導職兩三名御差下」というふうにして、箱館は長崎と同じようにキリスト教が蔓延している地域だから、ぜひ教導職を派遣してほしい。そういうふうに要請をいたします。

この当時、箱館を中心にした地域に、幕末に入ってきた人がキリスト教はどんなふうだったんだらうか。今でこそ函館西部地区はエキゾチックな町並みで、さも函館30万の市民の多くの方がクリスチャンになっているようにも、外見は見えなくてもいいんですが、そんなに数としては多くはないわけです。そもそも函館にキリスト教文化が入ってきた当時、㊸にありますように、明治5年のころの洋教一件と通称される事件が発生し、幕末の宮城県土族が捕えられるわけです。全部で85名も逮捕されるということになります。その数が示しますように、函館のキリスト教文化の最初は、宮城県を中心にした東北地方の土族が多くを占めていたわけです。それが、徐々に、明治末、それから大正時代にかけて市民の方にまで浸透していくということになるかと思いません。

次に㊸により、旧土人保護法とアイヌ民族について見たいと思います。

近世の松前藩政と幕府直轄によって、みずからの生活基盤すら改変させられたアイヌ民族。そのアイヌ民族は、近代天皇制の北海道開拓と開教によって、さらに追い打ちをかけられようとしている。年とともに進む臣民化に比例して、アイヌ民族の苦難はなお一層深まる。この窮状に、異宗の、つまりこれは邪宗から異宗になると思うんですが、キリスト教から救済の手が差しのべられる。ジョン・パチエラーを中心とした聖公会によるアイヌ学校の設置がそれである。案の定、臣民化の道を進める行政側は、キリスト教によるアイヌ教育活動に強い警戒心を示した。1880年代のことである。

こうした状況下、明治32年、1899年、アイヌ民族を和人による土地収奪から守ることを目的にした北海道旧土人保護法が公布施行された。その第9条に、旧土人が多い集落に小学校を設立することも含まれた。

このアイヌ民族の教育を通じた臣民化の道は、明治34年の旧土人児童教育規程により、具体的かつ実践的に押し進めることになる。ここに、アイヌ民族に対する言語と文字による日本化＝臣民化は決定的となった。臣民化は、天皇教、これは天皇制と同じことです、臣民化は、天皇教の宣布と表裏一体のものとして進められた。

次のところからは、第3の改宗騒動と見てもいいような、そういう臣民化というところの部分だと思いません。

例えば、十勝の伏古コタンには、旧土人保護法によって開設された第二伏古尋常小学校があり、この地内に小学校訓導の吉田巖が、大正5年、1916年、明治天皇を祭神とする神社を建立した。また、この小学校では、毎朝教員及びアイヌ児童が整列し、宮城の方位に向かって遙拝して、上級生が輪番で次のように誓詞を申し上げたという。「私共は、天皇陛下の大御教へを克く守ってよい日本人となる覚悟でございます」。今、アイヌ民族は、天皇制によって、言語だけでなく民族の霊である宗教すら奪われようとしている。すべての生き物に神性を認め、イヨマンテの儀式を伝承するアイヌ民族。和人と全く異なる独自の生死観を持ったアイヌ民族。そのアイヌ民族の宗教的世界にまで天皇教はまさに土足で入り込もうとする。これが、第3の改宗につながるかと思いますが、この明治時代、それから昭和の戦前期になりますと、一層それが際立ってくるかと思えます。

それが㉔に示すところですが、昭和17年、北海道仏教会が作成した「大政翼賛実践綱領」には三つの綱領がある。綱領の一つ目は、「皇室尊崇並ニ祖先崇拝ノ念ヲ一層深カラシメンコトヲ期ス」、二つ目は、「正シキ信仰ノ上ヨリ仏事ノ真意義ヲ体シ迷信ノ打破ヲ期ス」こと、最後の三つは、「日本精神ヲ高揚シ生活ノ更新ヲ期ス」の三つです。そのうちの綱領2は、仏教寺院の本来的な任務であるわけですが、1と3は寺院が天皇教の主翼を担う教導体であることを如実に体现するものです。その「綱領」は、さらに次のような具体的な「実践事項」を定めている。見ますと、寺院の天皇教化を示す無二の有益な資料です。

イとしまして、「我等仏教徒ハ皇室尊崇ノ念ヲ一層篤クシ、左ノ通り実践スルコト。(1)寺院及ビ教会ニ於テハ祝祭日ノ会合ハ申スニ及バズ、特殊ノ会合ニハ必ズ宮城遙拝並ニ「君ガ代」奉唱スルコト、(2)寺院ニハ皇恩報謝ノ為メ天牌ヲ奉安セルニヨリ、特ニ敬虔ノ念ヲ以テ拝礼スルコト、(3)陛下ノ御写真又ハ御尊影ハ家中最モ神聖ナル場所(例ヘバ床ノ間、正面鴨居ノ上)ニ奉安シ、新聞雑誌等ニ奉揚ノ皇室関係ノ御写真ハ之ヲ切り取り清浄ナル入レ物(尊皇袋ノ類)ニ納メ、不敬ニ至ラザル様注意スルコト、ロ、祖先ノ命日ヲ思フコト」、このように、この具体的な「実践事項」を見ると、国民の大半に及ぶ仏教の壇信徒は、自らの祖先の命日の供養よりも、まず第一に皇室尊崇の念を持つことを強要されていたということが手に取るようになります。仏教寺院は、天皇教の忠実なる推進体として、この神聖なる天皇にかかわるすべてのものを「神聖ナル」場所に奉安するよう、各壇信徒に教導をしていたと思えます。

こういう神社と寺院が片棒を担いだ形で、近代天皇制が1945年8月15日まで続いたわけですが、その中で先ほどの確認いたしましたように、アイヌ民族に対しても臣民化の強要を行っていったわけです。それを締めくくるものとして、㉕です。

これは、すごく私は意味のあることなんだと思うんです。アイヌ民族は、宗教観を除くすべての領域で「日本人」化された。天皇教によってつくり出された二人の「日本人」

が、旧土人小学校が廃され、共学になったある日、こんな想像を絶する場に立ち至った。一人は和人の「日本人」男子、もう一人はアイヌ民族の「日本人」少女、それは厳寒の中、ストーブだけが赤々と燃えている教室での出来事。手足が氷のようになった少女がストーブに近づこうとすると、和人の「日本人」男子が、何と「アイヌ、来るな。アイヌはあたらせない。人間の真似してストーブにあたるのか」となじったという。

平成9年7月1日、北海道旧土人保護法にかわってアイヌ文化振興法がようやく施行されて今日にいたります。全体の結論であります、アイヌ民族に対して、和人は中世の執権時頼の廻国伝説に検証したような形で、それが地蔵菩薩が蝦夷島に渡ってきて、それがさもアイヌ民族の教えになったかのような伝承がございました。それは、もしも伝説であっても、鎌倉幕府の宗教世界はアイヌ民族との接点があったとしますと、それは一つの改宗騒動としていることも間違いではないと思います。それと、二つ目に、幕府が蝦夷地を直轄した結果、有珠の善光寺、様似の等澗院、そして厚岸の国泰寺が建立され、その住職は、思いはどうであれアイヌ民族に対して、日本人の仏教、日本人の世界観を強要するように、アイヌ民族の心の中に踏み込もうとしたのではないかと思います。

かといって、アイヌ民族の方々が、それによって自分たちのみずからの伝統的な宗教観を捨てたかということ、全くそうではなくて、先ほど東北地方の蝦夷が坂上田村麻呂にやつつけられながらも、伝えて耐えろと。それと同じような思いで、表面はお参りを強要させられていたかもしれませんが、それはあくまでもそうやっていただけの話で、心の部分は一切変わることなく永遠と続いて今に至るのかなと思います。

ですので、蝦夷三官寺による改宗騒動といっても、あくまでもそれは和人側が騒ぎ立てたことだけであると。それと、三つ目は、明治政府が行った心の部分まで踏み込んだ臣民化の道であります。それもやはりアイヌ民族の心の、魂の部分は、私はさわるができなかったんだろうと思います。文字は強要しました、言葉もしました。しかし、一番民族としての最後の根っこであります世界観、宗教観、それは永遠に変えることはないだろうなと思います。

今日のお話は流れからいけば、アイヌ史における一大改宗騒動と言うべきなのか、三大改宗騒動と言うべきなのか。幕府直轄を中に挟んで、アイヌと中世的な改宗騒動があったとすれば、それは伝説の中で、そして、三つ目の改宗騒動があったとすれば、それは近代の天皇政府のかかわりの中でという、そういう三大改宗騒動というふうに位置づけたいと思います。それは、あくまでも日本人が言っているだけの話であって、民族としては全く心、血潮の部分にはさわるができない。それはまた許してはいけないと思います。ということをお願いして終わりたいと思います。最後のまとめとして、宗教の北海道的特性について一言触れますと、北海道は、まず、アイヌ民族との文化折衝、これが行われた唯一の地域だという点だと思います。

二つ目は新宗教、天理教とか金光教、立正佼成会、創価



学会、こういう既成宗教とは違った宗教も展開するわけですので、その意味で北海道は、日本の中でも唯一「宗教の博物館」という、そういう形容がぴったりの地域なのかなというふうに思います。

以上のことを申し上げまして、今日の私のお話は終わります。(拍手)

〔質問〕 大変わかりやすい御説明ありがとうございました。

一つ質問したいんですけども、蝦夷三官寺の改宗騒動のところの資料の⑩のところなんですけれども、目的のところでもキリスト教の排除によることを述べたというところに関してですが、そういったキリスト教を布教するような可能性があるというようにことに対しての警戒というのは、どうであったのでしょうか。そのことをちょっとお伺いしたいと思います。

〔佐々木〕 それはすごく大事なことだと思うんですが、これは強制的には恐らく、赤蝦夷といいますか、ロシアからの、特に国泰寺はロシアとの境に接しているわけですから、そこに対する警戒心はすごくあったんだろうなというふうに思うのです。

松前藩全体としては、もちろんキリシタン排除はとるわけですが、それを直轄期になってもこれをうたうということは、やっぱり対ロシアの南下策、その際にアイヌ民族がロシアの方に強化することを警戒したんじゃないかというふうに思うんですが。

別件で一言申し添えたいと思います。先日、函館にアイヌ語、アイヌ文化を教えに来ていただいている白老の岡田路明先生とちょっとお話する機会がございました。その岡田先生の奥さんはアイヌ民族の方で、先生自身も深い理解をされている方ですが、私はアイヌ民族の方は、今どういふような葬儀をしているんでしょうかという話を岡田先生にしたところ、岡田先生の身近な方を中心にしている話だと思いますが、日蓮宗に結構白老方面の方は改宗したということ、親類とかから聞いたことがありますという話になり、どうして日蓮宗なんだろうという話をしたんですね。

私は、南無阿彌陀仏というのは、阿彌陀如来に対して敬しますよというのが南無阿彌陀仏ですよ。ところがアイヌ民族の神観念は、そういう何々という具体固有名詞があることは、やっぱりそれは天皇陛下に通じていると同じぐらい違和感があるというふうな話をしました。

浄土真宗とか浄土宗に改宗する人は余りいないということは、恐らく想像ですが、アイヌ民族の方々は、阿彌陀仏という固有名詞に対して頭を下げなさい、手を合わせなさいということには、すごく嫌悪感があるんだろう。それに比べて、日

蓮宗の場合は、南無阿彌陀仏という教典ですので、南無阿彌陀仏とは違った意味があるために、改宗する人が多かったのではないかと、という話をしたことがあります。

でも、先ほど申し上げましたように、日蓮宗に改宗したからといって、アイヌ民族の方々が古来からの伝統的な宗教観を重んじなくなったというのではなく、たまたまお葬式のときに日蓮宗の坊さんが来て、導師を勤めるというだけの話であって、宗教観の根幹部分は全く変わらないんだらうなと私は思っています。そういう意味では、今日申し上げましたのは形式的な、改宗の名に値しないような改宗であり、やはり、アイヌ民族の伝統、世界観はいまだにずっと民族の心の底に根付いていると思います。

〔司会〕 それでは、時間となりましたので、この辺で本日のセミナーを終わります。

改めまして、佐々木先生どうもありがとうございました。(拍手)